

《研究ノート》

トランスナショナルな視点から見る、宝塚とアメリカ人女性ファン -西洋化された、女性だけの宝塚歌劇団理解とその考察-

入江 敏子

I. はじめに

宝塚歌劇団（以下宝塚と呼ぶ）は 1913 年に箕面有馬電軌（現阪急電鉄）の経営者であった小林一三により設立された。もともと宝塚新温泉をオープンさせた際に、余興の一つとして少女のみで構成された歌劇団は、2017 年現在で、年間観客動員数 270 万人を超える日本を代表する歌劇団の一つとなった。当時歌舞伎が衰退していくのを直視していた小林は、伝統的な歌舞伎を基盤にしながらも、西洋的な要素を取り入れ、いかに新たな日本文化として歌劇を定着させていくのかを模索していた。歌舞伎を基調とし、日本演劇的な要素を保ちながら、常に「モダン化」してきた宝塚は「国民劇」として、1 世紀以上も続く大衆文化とみなされている。

宝塚は 1930 年代から今日に至るまで、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで数々の公演を実施している。特にアメリカでは、ニューヨーク、ホノルルなどを中心に 1930 年代から幾度と公演を行ってきた(橋本, 1994)。2016 年、宝塚を卒業した OG 達が集い、ニューヨークのリンカーンセンターで、宝塚版「シカゴ」が上演されたのも、その一例として挙げられる。近年ブロードウェイ・ミュージカルでは人種や同性愛が話題とされる舞台が多く上演されている。例えば、本来なら白人と設定された役を、黒人が演じた「ハミルトン」が 2016 年トニー賞史上初 16 部門にノミネートされ、11 部門を受賞。黒人が主演男優賞

に輝き、大きな反響を呼んだ。また、同性愛者である漫画家アリソン・ベクダルの半生を描いた「ファン・ホーム」は、2015年にトニー賞で主要5部門を獲得した(Tony Awards Official Website 2015,16)。しかしながら、こういった社会文化的にマイノリティと見なされる人々への理解を、ブロードウェイが進んで提示し始めているにも関わらず、アメリカ国内のメディアは、こぞって日本人女性が男性と女性を演じる、宝塚版の「シカゴ」を批判した。ニューヨーク・タイムズ紙、ガーディアン紙は、それぞれ、宝塚を「本物の『シカゴ』ではない」、「ホモセクシュアルな関係性を描く歌劇団」と表現した(The New York Times 2016, The Guardian 2016)ⁱ。つまり、西洋を真似する、女性だけで演じるホモセクシュアルな歌劇団として、宝塚を非難したのである。彼らは、アメリカのブロードウェイで演じられる「シカゴ」に真正性を見出し、宝塚を、同等に値しない、非西洋的なものとして考えていたのであろう。また、女性のみ之歌劇団という特徴を、「ホモセクシュアル」と表現した上で、宝塚を周縁化し、他者として扱った。「ハミルトン」や「ファン・ホーム」はアメリカ国内で評価されているにも関わらず、これらメディアによる批判は、アメリカと日本の舞台演劇を完全に分化し、両者が交わることに否定的である。しかしながら、リンカーンセンターで観劇していたアメリカ人の中には、感動し、涙を流して、「シカゴ」を観劇する者がいた。宝塚のアメリカ人ファンであるⁱⁱ。それでは、宝塚のファンである彼女達は、宝塚をどのようにみているのであろうか。

イアン・ティレルは2007年に著した本 *Transnational Nation- United States History in Global Perspective since 1789* と2009年の論文“Reflections on the transnational turn in United States history: theory and practice”で、国家間には、不均衡な権力関係が存在すると言っている。しかしその関係は、どちらかが一方的に働きかけ、支配をするというよりも、お互いが影響を与え、与えられる存在であると主張する(Tyrell 2009:465)。

ティレルのいうこの「トランスナショナル」は、国家間の国境を当たり前のものと捉えるのではなく、人々、物、思想、技術などの流れに焦点を当てることの重要性を説いている。また、国家を超えた文化の交流において、人々が様々に、文化的国境や国境を越えた価値観を構築している点を明らかにしたⁱⁱⁱ。デイビッド・セルンもティレル同様、時間、場所、国家を焦点としてアメリカ史が語られることに、問題を掲げている(Thelen 1999:967)。人々に注目し、どのように彼らが国境を明確にする一方で、その国境を同時に曖昧にするのか、という過程を考えることは、新たな文化の形や相互の関係性を示す、とセルンは言う(同:973)。つまり、人々は国境という枠組みを超えることが出来る一方で、その国境を明確にすることも可能とする存在だ、と説明する。人々は自由自在に異文化を取捨選択し、国境を操作しながら、従来の文化の意義や意味を変化させていく。

以上のことをふまえ、本稿では、宝塚版「シカゴ」で主に批判された、西洋的な、女性

だけ、という宝塚を構成する主要な2点に着目し、宝塚のアメリカ人女性ファンがこれらをどのように見ているのかを紹介する。宝塚に関する先行研究は、セクシュアリティやジェンダーのみに注視されているものが多い。また、ファン研究の一環としても宝塚が例に挙げられることが多く、大半が日本人女性ファンを研究対象としている。これらの研究は、宝塚を、日本人女性ファンのための舞台芸術であり、対象である日本人女性ファンとタカラジェンヌ^{iv}のセクシュアリティやジェンダーに関する考えに注目をしている。そして、宝塚を日本固有のものであるとする印象を与えてきた。しかし、既に述べたように、宝塚は以前からアメリカ公演を行い、現在アメリカ国内でも、女性を中心としたファンコミュニティが活発に活動を行なっている。本稿では、こういったアメリカ人の女性ファンに焦点をあて、彼女達の宝塚理解を分析し、彼女達がどのような社会文化的価値やアイデンティティを、宝塚を通して、構築しているのかを考察する。アメリカ人女性がどのように宝塚を理解しているのかを分析することで、彼女達が宝塚をどのように見て、その意義をどのように紡ぎ直しているのかを明らかにしていく。そして、日米という国家間を行き来する複雑で絡み合ったファンの見解を、トランスナショナルをキーワードに導いていく。

本稿では主に3つのパートに分けて宝塚とファンの考察を行う。先ず初めに、宝塚の西洋化に着目し、トランスナショナルをフレームワークに考察を行う。宝塚版の「シカゴ」に非難があったのと同様、先行研究では、日米の不平等な権力構造を日本文化に反映し、西洋を真似する宝塚を、文化的地位が低いものとして描きがちである。しかしながら、今回対象とするのは、宝塚ファンコミュニティに所属し、定期的にファンミーティングに参加するアメリカ人女性であり、彼女達は、一概に宝塚を文化的地位が低く、劣っている、と認識していない。彼女達に注目することで、一般的な構図として成り立つ、優れたアメリカ、劣った日本という権力関係を越えた関係性に着目し、宝塚の西洋化について、新たな可能性をアメリカ人女性ファンの視点で語ることの意義について述べる。

次に、宝塚の女性だけ、という特徴に着目をする。既に述べたように、アメリカメディアは宝塚版の「シカゴ」を、ホモセクシュアル、と批判した。第2部では、宝塚と女性同士の関係性に関する先行研究の見解と、その限界について論じる。その上で、トランスナショナルな観点を使い、アメリカ人女性ファンの視点を新たな切り口として、女性だけで演じる宝塚を再考察する意義を説明する。

最後にアメリカ人宝塚ファンのインタビューを紹介する。主に宝塚の西洋化、女性のみ、という2点に着目し、彼女達がどのように宝塚を理解しているのかを分析していく。西洋を臭わす宝塚に何故惹かれるのか、また女性だけで演じる宝塚についてどう思うのかを焦点とし、インタビューの分析を行う。

II. 西洋化した宝塚

宝塚の芝居は日本もの、洋もの、に分けられているが、国内での上演は、洋ものが比較的多い^v。レビューにおいては、歌劇団が設立されて以来今日に至るまで、欧米諸国の音楽やダンスを基に作り上げられた作品が大半を占める^{vi}。そのため、宝塚の演出、舞台装置、衣装などにおいて、欧米諸国からの影響は、宝塚を作り上げる重要な要素である。既に述べたように、創立者の小林も、大衆の移り変わる嗜好に合わせて、西洋的要素を交えることは、歌劇団を今後活性させるために重要であると認識していた。宝塚における最初の西洋化は、1927年、集客の悪さに悩まされた歌劇団が新しく路線を打ち出すために、海外のレビューを宝塚の舞台とする動きが高まったのがきっかけである。当時宝塚に入団していた演出家岸田辰彌は、パリに留学し、帰国後、パリで自身が観たレビューの歌、ダンス、衣装等を再現し、日本で初めて海外物のレビュー「モン・パリ」を演出した。本物のパリのレビューが描かれている、ということで、当時多くの日本人ファンの中で「モン・パリ」は真新しいものとして受け入れられた。その後、1920、30年代に、洋ものを中心として、宝塚は国内で知名度を上げていく。また、この時期に宝塚の海外公演の話が持ち上がり、宝塚サイドも海外公演に前向きな姿勢を示していたとされる(渡辺 1999:116)。つまり、宝塚の「西洋化」は西洋諸国が押し付けて進んだのではなく、当時の日本人観客の評判により進んだのである。

これに対し、渡辺は宝塚がヨーロッパやアメリカですんなり受け入れられなかった、と著書で語っており、その最大の理由は「宝塚の西洋化」(渡辺 1999)にあったとする。例えば、ブロードウェイプロデューサーのレイ・カムストックが1928年来日し、宝塚を観劇した際、「全体としてもっと日本らしいものを期待していただけに」と西洋化した宝塚の舞台を批判した(同:121)。宝塚は1938年に初めて海外公演として、ドイツ、ポーランド、イタリアで計26都市を巡演、翌年にはホノルルと米本土9カ所で公演を行ったが、カムストックのような欧米人の声を反映させ、全ての公演で日本ものが上演された(橋本 1994:48-9)。つまり、日本で当時一世を風靡していた、洋ものではなく、欧米人の期待にあわせた、オリエンタルで、エキゾチックな、日本ものが故意に選ばれ、上演されたのである。故に、宝塚の日本ものは、西洋人の評判によって初めて促された側面が大きい。宝塚の洋もの、日本ものは日本と西洋の交流に影響を受け、つくられたものなのである。

しかし、レチンスカは論文「西洋における宝塚歌劇需要の諸問題」で、宝塚の特に、洋ものの芝居やレビューを、「芸術的カオス」(レチンスカ 2013:96)、「キッチュ」(同)^{vii}、「芸術品価値を奪う」(同:97)と批判した。加えて、レチンスカは、宝塚が西洋人に受け入れられないのは、本来ハイカルチャーとして見なされる西洋の舞台を、日本の宝塚が単に真似しているためであり、西洋の舞台と宝塚が、西洋人に同等に扱われることはない、

と記している。ここでレチンスカは、ハイカルチャーを西洋の芸術品と同一視している。また西洋では、「高級芸術品と低俗芸術、純粋芸術と大衆芸術、基本的に芸術と娯楽」を厳格に区別化するため、宝塚の様な様々な要素が一緒くたになった舞台に「芸術的、文化的社会的な価値」は無いとする(レチンスカ 2013:95)。レチンスカの議論は、ハイカルチャーとされる西洋の舞台芸術は、非西洋人が携わるとその真正性が失われる、という前提をもとになされている。つまり、西洋的な舞台は西洋人固有のもので、西洋人であることが真の西洋舞台芸術を創作できる必要条件である、というわけだ。

渡辺、レチンスカ、「シカゴ」批判をしたアメリカメディアは、日本と西洋には変化することのない、元来備わった、決定的に異なる文化が存在するという前提で、宝塚を日本独特の舞台芸術として捉えているのである。しかしながら、宝塚のアメリカ人女性ファンに注目すると、日米間に存在する政治的、文化的、経済的な権力関係が人々や舞台芸術に影響を与えるのではない、ということがわかる。そして、そういった両国の関係性によって作り出される不平等な文化的ヒエラルキーを、彼女達が宝塚を通してどのように生きているのか、また、国境を越える文化を彼女達がどのように再構築し再定義しているのかを示すことで、新たな宝塚理解を提示することが可能となる。

III. 女性だけで演じられる宝塚

西洋化の他に、女性のみで演じられる、という点も宝塚を構築する重要な要素の一つである。宝塚は演者が全て女性で構成されており、女性同士で男女の恋愛模様を舞台で描く、世界でも極めて異例な舞台芸術の一つである。宝塚版「シカゴ」を批評したアメリカメディアは、日米間に存在する文化的権力関係を反映し、女性のみ、という特徴を、ヘテロよりも劣るとされる、「ホモセクシュアル」な舞台芸術である、と表現した。こういった指摘を踏まえて、この段落では、女性のみで演じる、という点に注目をし、先行研究を交え、特に舞台上でのタカラジェンヌの関係性と、それに対するファンの視点について考察する。またトランスナショナルな視点から、女性だけで演じる宝塚を分析するため、アメリカ人女性ファンの視点に注目することの重要性を説く。そうすることで、日本という枠組みの中で日本人ファンについて語られてきた先行研究よりも、国境を超えた存在であるアメリカ人ファンがもたらす、新たな、女性だけ、という宝塚の特徴を示すことが可能となるであろう。

ジェニファー・ロバートソンは、著書 *Takarazuka -Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan-*で、それまでの宝塚研究で深く触れられてこなかった、宝塚のセクシュアリティに焦点を当てた。女性同士が演じることで垣間みえるホモセクシュアリティ、また日本人女性ファンと男役のセクシュアルな関係性と欲望、加えて、日本国内に見られる

異性愛規範や女性への社会的な圧力を同時に描いた。ロバートソンは、日本社会で「強制的異性愛」を強いられる日本人女性達が宝塚に惹かれる理由の一つは、宝塚という、ある種守られ、制限された空間の中で、同性愛を男役に望むためだ、と主張する(Robertson 1998)。また、そのような女性ファンを一貫して「病的」と表し、日本のメディアで1930年代に取り上げられていた宝塚批判、特に宝塚に見られる同性愛批判と共に述べている(同)。ロバートソンはここで、タカラジェンヌ同士の関係性、特に男役、娘役^{viii}の関係性について記述をしている。そして、ファンは男役と娘役の間に見えるエキゾチックで、曖昧なエロティックさに魅了されると述べている。ロバートソンはこういった男役と娘役の関係性は、「ホモエロティックさを主張した、ファンが望む関係性」としながらも、あくまでファンタジーの世界であるからこそ認められ、「セクシュアルプラクティス」として直接的に劇団側から語られることは一切無い、と主張する(同:186)。

ロバートソンは、タカラジェンヌの情報を規制するルール、すみれコード^{ix}の中で、未だ語られることの無い、ホモセクシュアルで、ホモエロティックな宝塚、という鋭い視点をもたらした。また、ロバートソンは、日本という枠組みの中で、宝塚とファンをとらえている。宝塚が、宝塚の外の日本社会では許されないホモセクシュアリティを描く舞台芸術であるため、日本人女性ファンは、それにストラグルする女性であると主張し、宝塚のファンも日本特有のものであるという印象を強めている。

ロバートソンの研究に対し、東は、宝塚が女性のみで構成されている、という点において、舞台上でのパフォーマンスのみが取り上げられ、宝塚の独自性、特に「タカラジェンヌの四層構造」^xの分析が十分にされていないと主張する(東 2015:79)。東は著書で、特に、オフステージでのタカラジェンヌに注目した。オフステージとは、すみれコードで制限された状況の下、ファンが舞台を下りたタカラジェンヌたちの様子や、彼女達の関係性を見ることが可能な場を意味する^{xi}。ファンはオフステージでのタカラジェンヌの関係性を舞台上に反映している。そのため、一概に舞台上でタカラジェンヌの性愛的関係を見ているのではなく、むしろ、オフステージで見る彼女達の「真の友情」、「ホモソーシャルな関係性」に惹かれている、と東は論じる(東 2015)。ここで使用される「ホモソーシャル」とは、イヴ・コゾフスキー・セジウィックの『男同士の絆』(Sedgwick 1985=2001)で定義される、男同士の友情や絆、師弟愛をさす。東は、ファンは舞台上のタカラジェンヌのホモセクシュアルな関係性に惹かれているのではなく、オフステージでの関係をふまえ、非性愛的ホモソーシャルな関係性に惹かれているとする。

東は自身も宝塚のファンであるために、ファンとしての視点を通して、宝塚を考察し、タカラジェンヌの関係性について、ファンが何故惹かれるのかを、非性愛的なホモソーシャルと言う言葉で結論づけている。しかしながら、こういった東の見解は、日本という国

家の枠組みから、日本のファンのみについて考察されているため、女性同士を特徴とする宝塚理解の幅を同時に狭めている、とも言える。

ロバートソンと東は研究対象を日本人に限定し、宝塚という日本の舞台芸術は、ホモセクシュアル、あるいは、ホモソーシャルな女性同士の関係性をファンに提供する、と述べる。確かにそれぞれの視点は、宝塚研究およびファン研究に新たな視点をもたらしたと言えるであろう。しかし、両者は、宝塚の女性同士の関係とは、実は様々な主体によって多種多様に解釈され、具現化されるということを示していない。アメリカ人女性ファンに焦点をあてると、アメリカ国内で置かれた社会文化的状況に応じて、彼女たちが、自由自在に、女性だけの宝塚、という特徴を利用し、女性同士の関係性を再定義していることがわかる。彼女達はどのように、女性だけの舞台芸術という、日本の宝塚の特徴を解釈し、アメリカ人として新たなファンダムを築き上げているのだろうか。特に今回のインタビューでは **LGBTQ** と認識するファンにも注目をし、彼女達が女性だけで演じる宝塚に、なぜ、どのように魅力を感じているのか、特にファンになった経緯に重きを置き、彼女達が何故自らの意志で宝塚を選び、女性だけの宝塚をどのように理解しているのか、について考察する。

IV. アメリカ人女性ファンへのインタビューとその分析

筆者は 2017 年 8 月に、アメリカ人女性ファン 5 人と日本人女性ファン 2 人に宝塚についてニューヨーク市内で聞き取り調査をおこなった^{xii}。図表 1 にまとめたが、彼女達の年齢層は 20 代 3 人、30 代 3 人、50 代 1 人である。職業は様々であるが、全員がフルタイムおよびパートタイムで働いている。またアメリカ人ファン 5 人のうち、4 人は白人と自認しており、1 人だけがアジア系アメリカ人だと私に自己紹介をした。日本人も含め、7 人はニューヨーク近辺に在住で、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の一つである、フェイスブックのファンコミュニティ、「ニューヨーク宝塚歌劇団ファンの集い」のメンバーである。この宝塚ファンコミュニティはフェイスブックの中で北米一のメンバー数^{xiii}を誇っており、月に 1 回程度、メンバー同士で集まり、集会を行っている。本インタビューは、彼女らがマンハッタンにあるレストランで、月に 1 度のランチミーティングを開いた際に、筆者が行ったものである。インタビュー時間は 3 時間程で、筆者が尋ねる質問をメンバーそれぞれが答え、それについて皆で話し合いをする、といったカジュアルなスタイルで行った。また、インタビュー全てを英語で行ったため、本稿に用いたインタビューは筆者が翻訳をしている。

図 1.

	年齢	職業	ナショナルリティ	ファン歴	日本渡航頻度 (宝塚観劇の為)	その他
C	30代	グラフィックデザイナー	アメリカ人	5年	年に一度、長期滞在(2ヶ月程)	・宝塚関連のメディアを翻訳 ・Facebookコミュニティの管理人
B	30代	人事会社勤務	アメリカ人	2年	今までに一度だけ	大学でシアターを専攻
H	30代	ロボット工学アシスタント	アメリカ人	3年	年に一度、2週間程の滞在	・2016年には10日の滞在で8回宝塚を観劇 ・LGBTと認識
A	20代	レストランサーバー	アメリカ人	3年	年に一度、2週間程の滞在	・2016年には10日の滞在で8回宝塚を観劇 ・LGBTと認識
I	30代	ソーシャルワーカー	アメリカ人	10年程	渡航経験無し DVDを主に鑑賞	アジア系アメリカ人と自認
Y	50代	まつげエクステスタイリスト	日本人	3年	日本に帰国する度に鑑賞	Facebookコミュニティの管理人
U	20代	銀行員	日本人	20年以上	日本に帰国する度に鑑賞	宝塚好きの両親に影響を受ける

先ず初めに、アメリカ国内での宝塚に対する批判について、特に 2016 年にニューヨークで上演された宝塚版「シカゴ」についての意見を聞いてみた。ちなみに彼女達は全員この時の「シカゴ」を観劇している。

元々宝塚のことは知っていたけれども、「シカゴ」で初めて生の宝塚を観た。それからハマったのだけれども、一緒に行った友達は、正直唾然としていて。なんだろう、多分言語のバリアとかかな。アニメは基本的に字幕があるけれども、宝塚は舞台にも、公式の DVD に字幕をつけたりすることは無いし。(B)

B の言う、「友達は、正直唾然としていて。」という見解は、恐らく、「シカゴ」を批判したアメリカメディアの反応と同様であろう。B は「言語のバリア」が、アメリカ社会が宝塚を受け入れない理由の一つとして挙げている。

「シカゴ」がアメリカの作品だし、何故日本から来てわざわざアメリカの作品をやる必要があるのか、とリポーターの人たちが困惑したのだと思う。「日本らしいもの」を期待していただろうから。宝塚を知っている私たちみたいなファンは、「待ってました！やっとなアメリカに！」と喜んでいたけれども、一般のオーデ

イエンスはそうじゃなかった。というか、そもそもアメリカ人は女性だけの歌劇団にあまり興味がないみたい。私の母がダンスをやっていてダンス好きだから宝塚も好きなんじゃないかと思ってみせたら、「どこに男の人がいるの!？」って。アメリカ人の女性でも理解できないのだから、(アメリカ人の)男性なんて絶対理解できないのだろうな、と思う。(C)

Cはここで、渡辺やレチンスカが述べていた様な、宝塚の日本らしさ、エキゾティシズムの不足が、アメリカ社会に受け入れられなかった理由だと述べている。更に、女性だけの宝塚に対し、「アメリカ人は女性だけの歌劇団にあまり興味が無い」と言っている。ここでCは、女性だけの歌劇団が、ごく一部でしか知られていないサブカルチャーとして、アメリカ社会で捉えられている、とも語る。というのは、宝塚版「シカゴ」でも批判があったように、宝塚をホモセクシュアルな劇団とみなすアメリカ人が多いため、社会的に受け入れられにくいと、彼女は分析しているように思えた。

更にIはレチンスカの言う、ハイカルチャーな西洋文化と宝塚を見比べた上で、質問に答えた。

先ず、アメリカ人は基本的にアジアのメディアのことを安っぽい、劣ったものだと思っている。これはレイシャルバイアスで、とても残念だけれども、実際に存在する。シアター自体がそれほど主流ではない中で、海外の劇団、日本語、女性だけ、作品も衣装もけばけばしい、アジア人が白人を真似している。それだけでアメリカの「本物」の「シカゴ」とは違うし、劣っていると思うのだろう。(I)

Iはアジア系アメリカ人であり、白人とアジア人に焦点を当て、アジアの文化が白人社会で劣っているとみなされがちだ、と語った。そして、彼女自身がアメリカ社会に対して一種の批判的な態度を持つ印象を受けた。

「シカゴ」の批判を見た時は本当に腹が立った。「ホモセクシュアル」って何かの記事に書いてあったけれど、宝塚を全然理解していない。彼女達は自分の役割を果たしているだけ。男役が娘役を持ち上げてキープするっていうシーンがオリジナルと同様にあったのだけれども、彼女達は全く男性に劣っていなかった。同じ女性として本当に誇らしいと思った。(H)

H はここで、女同士で演じる宝塚を「ホモセクシュアル」と述べた記者に対し、「宝塚を全然理解していない」という、東の様な見解を述べている。しかしながら、H は LGBTQ と自身を認識している、とインタビュー後に筆者に言ってきたため、東の言う、非性的な「ホモソーシャル」な関係性だけに彼女が魅力を感じているとは言いがたい。彼女達のセクシュアリティ、ジェンダーアイデンティティ、とアメリカでの立場を考慮することで、H が女同士という宝塚の特徴を、どのように捉え、理解しているのか、といった問に対する答えが見えてくるのではないか。後のインタビューで更に考察をしたい。

興味深いことに、ここで回答をした彼女達は皆周囲の宝塚に対する批判を知っており、宝塚がアメリカで受け入れられていない理由を細かに分析し、それを受け止めていた。しかしながら、彼女達はこういった批判がある中でも、自身を宝塚ファンだと認識し、毎月の集會に顔を出すのである。こういった彼女達の宝塚に対する視点は、国家をフレームワークとして語ってきた、渡辺、レチンスカ、ロバートソン、東では語られておらず、トランスナショナルな視点をを用いて彼女達の存在を重視することでこそ、見えるものである。

次に、宝塚の西洋化について視点を絞り、おのおのの意見を聞いた。まず、洋もの、日本もの、どちらが彼女達にとって魅力的であるかどうか、渡辺やレチンスカのいう、日本らしさは必要なかどうか聞いてみた。

私は雪組^{xiv}のファンだけれども、洋ものが好き。というのはまだ日本語を学んでいる途中だから、日本ものよりも洋ものの方がストーリーを追いやすいからっていうのはあるかもしれないけれども。日本ものってたまにすごく政治的で、ほとんど歴史的なストーリーが多いから、言語だけでなく、そういった日本の知識も必要だよ。(B)

私も全く同じ。両方好きだけど、たまに日本ものって見ていてわからなくなる。もし日本語を全てパーフェクトに理解できたら、違う意見なのかもしれないけど。でも洋ものってたまに「やり過ぎ」って思うことはある。なんか古いハリウッド映画みたいな？でも私そういうの好きだし。(C)

多分、私の周りの多くの宝塚ファンは洋ものが好きなんじゃないかな。「シカゴ」がアメリカで上演されたとき、今日みたいなミーティングがあったのだけど、そこでも「シカゴ」じゃなくて、日本ものにするべきだったのか、アメリカで既に知られている、洋もののままで良かったのか、みたいな議論があった。(A)

B、C、A の回答を見る限り、渡辺が述べていた様な海外の嗜好に合わせた日本ものに、ファンである彼女達はそれほど重きを置いていないようである。日本らしさを感じるために宝塚に魅了されているというよりも、宝塚が好きだからストーリーを理解しようとする、彼女達の努力の方が強調されている。また日本らしさにそれほど注視しない理由は、彼女達が、宝塚が日本の歌劇団であるからファンになった、というよりは、好きになった宝塚が、たまたま日本の歌劇団であった為ではないであろうか。換言すると、日本らしさを前面に出した宝塚をそのまま受け入れるというよりも、彼女達が宝塚の中に、自らの文化により沿った、洋ものを発見し、宝塚を理解したい、という自らの意図に合わせて、あえて洋ものを選んでいるのである。しかし同時に、彼女達はCが言っているように、宝塚の洋ものを「やり過ぎ」とも捉えており、Cはアメリカの昔のハリウッドと宝塚に類似性を示している。この点において、Cはアメリカ人オーディエンスの一人として宝塚を見ており、日米間にある文化国境を明らかにしているのである。つまり、アメリカ、日本、どちらかにただ合わせているのではなく、国境の狭間に立って、自分たちの目的や用途に合わせて、宝塚を構築する要素を取捨選択しているといえる。言い換えると、渡辺やレチンスカの非難する、西洋化された宝塚は、彼女達にとっては一つの便利な宝塚を理解するためのツールであると同時に、彼女達の立場や状況によって、宝塚の持つ、西洋という要素を構築し、使用しているのである。

次に女性だけの宝塚について、ロバートソンや東の論を参考に、まずは男役娘役の関係性的に絞って、両者の関係についてどう考えるか、聞いてみた。

トップスターの男役と娘役の関係性は本当に重要だと思う。例えば、ちぎみゆ ^{xv} っですごく大好きなコンビだけれども、それはちぎさんが娘役のみゆちゃんにただ後ろ立てしてもらってというだけじゃなくて、みゆちゃんにも自分と同じレベルを望んでいたから。私はそうやって男役も娘役も同等に扱われているコンビに魅力を感じる。(A)

私はずっと月組のファンだけど、龍真咲さんが男役トップスターのときはトップコンビの関係性が良くないのが舞台からも、オフステージの時からも伝わってきた。それに比べてちぎみゆの舞台は二人の関係性が良いのがすぐに分かる。今じゃ龍さんがいなくなって、新たな男役トップスターの珠城さんが来たけど、全然雰囲気が違う。歳も近いからかなあ。今の二人なら本当に良い関係なんだなあって思える ^{xvi}。(日本人 U)

ここで、ほぼ全員が、オフステージの彼女達の関係性も考慮した上で、二人のコンビとしての関係性が重要だと答えた。彼女達の見解から、ロマンチックな異性愛的関係性を男役娘役に求めているというよりも、「良い関係」、それは恐らく、ロマンチックな男女の関係と言う言葉だけでは言い切ることの出来ない、より多様な親密性に惹かれている印象を受けた。そのため、ロバートソンが著書で言っていた様な、ホモセクシュアルな関係性だけを求める者は一人もいなかった。しかしながら、Ⅲで述べたように、新たな視点を導くためには、ただホモセクシュアルか、ホモソーシャルか、に決めるのではなく、アメリカ人である彼女達が、宝塚で描かれる女性同士の関係性をどのように解釈しているのかを問う必要がある。更に、彼女達のアメリカでの立場やアイデンティティ形成にも触れながら、女性だけの宝塚における多様な理解を紐解いていく。

次に、宝塚でたまに描かれる、すみれコードギリギリの親密な身体的関係性を舞台上で表す演出についても聞いてみた。

たまに男役同士が親密な関係性をもつシーンが宝塚ではたまにあるけど、私はすごく好き。伝統的なロマンチックな男役、娘役の関係性を壊すためかな。娘役との関係性に比べると、もっと身体的な密着度が高いシーンが多い気がする。なぜか分からないけどオペラグラスで見ちゃうよね、そういうシーン。(C)

Cによるこの「なぜか分からないけどオペラグラスで見ちゃう」というのは興味深い回答である。彼女はロマンチックな関係性だけを見いだしている訳ではないのに、なぜかそこに興味を持ってしまう、という。Cだけでなく、回答者7人全員がそういったシーンが好きだと答えた。

宝塚はずっとそういうシーンを演出の一部として続けている。アジアのメディアは同性同士のそういう描き方って歴史的にずっとあるよね。イケメンなタカラジェンヌが一人よりも二人いた方がファンにとってうれしいというのもあるのかも。Cも言っていたけど、宝塚って伝統的に理想的な男性と理想的な女性との関係性を描いたロマンスがたくさんある。けれども、ホモセクシュアルなロマンスを描くことでその伝統を壊そうとしている。女性同士なのに、男性同士で、ダブルのホモセクシュアリティだよ！それってすごくおもしろい。特にLGBTQのファン達はこういうシーンをアメリカの劇場で見ることが出来ないから興奮するののかも。(I)

ここで I の記述から、彼女がアメリカ人として、宝塚を見ている印象を受ける。彼女はアジアの同性同士の描き方を、アメリカ国内に存在しない一種の「別」の文化として捉えているためである。I は日米間の文化的国境を感じながら、アメリカ人としてのナショナルアイデンティティを新たに作りあげているように思えた。また上で述べたように、I はインタビューのなかで唯一のアジア系アメリカ人であったため、アメリカ人として、そしてアジア人として、複雑なアイデンティティを背景として持ちながら、このようにアメリカと日本を差別化しているように捉えることが出来る。

宝塚の一ファンとして、私は宝塚の文化を理解しているつもりだから、ホモセクシュアリティを彼女達の間には感じないけれども。ただ、アメリカ人にとってアニメみたいにテレビで気軽に見られるものでもないし、宝塚ってとって見つけるのが大変。日本語を理解しないとサブタイトルが基本的に無いから、分からないし。まず宝塚について知らないといけないし、興味が無いといけないし、(メディアとしての宝塚を) 探さないといけない。じゃないとファンにならない。私はファン友達に多くの LGBTQ コミュニティに属している子を知っているけれども、宝塚って日本では主流文化で、財政的なバックアップも十分で、日本屈指の大きな劇場があるし、女性だけの、恐らく世界唯一の歌劇団でしょ。だから、彼女達にとって宝塚みたいなメディアって彼女達の世界でほとんど存在しなくて。確かに、日本人のファンと比べると、ヨーロッパアメリカの LGBTQ の人たちは宝塚をそういう風に見ている人が多くいるのかもしれない。(C)

歌劇団自体がホモセクシュアリティを売りにしようとしているとは全く思わない。だけど、確かにアメリカに視点を移すと、ホモセクシュアルな部分が誇張されるのかも。すごく興味深いけれども、アジアって同性愛的なものに厳格である一方ですごくルーズな面もあるよね。アメリカでは「全員女性」っていうだけでレズビアンだって思われる。(I)

ここで C と I の発言から、LGBTQ のファンについての見解がうかがえる。C の発言に、宝塚は日本で「主流文化で、財政的なバックアップも十分で、日本屈指の大きな劇場があるし、女性だけの、恐らく世界唯一の歌劇団」とある。アメリカの LGBTQ のファンは宝塚が日本で一種の主流文化とされている為に、宝塚に興味を持つケースが多い、というのがうかがえる。また I も言うように、女性だけの歌劇団、という特性は、アメリカという枠組みから見ると、タブーとされる。その為、日本で主流な舞台演劇として認められ、公

に女性同士が絡む演出が許されている宝塚に、LGBTQ と認識するアメリカ人女性ファンが魅了される。そして、彼女達にとって、宝塚は国境の外で正当化された、新たな拠り所となっていくのである。アメリカ人女性が自らの目的に合わせて、日本の宝塚が本来意図しない、ホモセクシュアリティを宝塚の中に見だし、自らのセクシュアル、ジェンダーアイデンティティを正当化するという目的で、新たに、女性のみで演じる、という特性を再構成しているのである。しかしながら、それと同時に、LGBTQ と認識する彼女達が、ただ単にホモセクシュアリティを宝塚に望んでいる訳ではない、というのは先ほども述べた通りである。それでは彼女達は、宝塚で描かれる女性同士のどのような関係性に惹かれるのか。

歌舞伎って全員男性で、男性が女形をやるでしょう。だけど何百年という歴史がある中で誰もゲイのショーとは言わない。日本では、逆の性を演じる文化が割と一般的だと思う。だからいつもアメリカとかヨーロッパの人たちが宝塚を一体どういう風に見ているのだろうって考えていた。例えば、私がレズビアンだとする。たまたま宝塚を見つけて、この劇団にはイケメンが沢山いるし、皆がレズビアンなのだ。よし、じゃあ私もファンになろうって思って、後々彼女達がレズビアンじゃないってことが分かったら、私はショックを受けたり悲しくなったりするのだろうか。(日本人 Y)

(Y の返答として)

そんなことは無いと思う。確かに西欧のファンにレズビアンは多いけれども、彼女達はそれでもなお宝塚を楽しんでいるし、宝塚にレズビアニズムを求めているとは正直思えない。彼女達は宝塚にそれを望んでいる訳でもない。ただ、彼女達が社会的にマイノリティであるがために、彼女達が望む様なメディアが少なく、女性のために作られて、全員女性が演じているというだけで彼女達は宝塚を楽しんでいるのだと思う。そういう意味で宝塚は彼女達にとって特別な存在だと思う。

(C)

既に述べたように、LGBTQ に属するアメリカ人女性ファンの多くは、アメリカ国内の主要メディアで、女性のために、女性のみで男女の恋愛模様を描くものはほとんどないため、日本で主流文化と扱われる宝塚に興味を持った、というのは恐らく事実であろう。しかしながら、Y と C の会話から分かるように、宝塚に一度没頭してしまい、ファンになることで、ホモセクシュアルな歌劇団、という概念は恐らく二の次になるファンが多いのではな

いであろうか。インタビュー後に A と H が LGBTQ として自己認識していると判明したのだが、彼女達はインタビュー中、宝塚にホモセクシュアルさは望んでいない、と答えた。主に LGBTQ のファンの中には、アメリカでは稀な、ホモセクシュアリティが一見認められている宝塚に興味を持ち、本来宝塚が意図しない、女性同士のホモセクシュアリティに魅力を感じている者もいる。一方で、ファンになり、宝塚をより知っていくと、単にホモセクシュアルが許される異文化、と宝塚を捉えるのではなく、東の言うような、ホモソーシャルな宝塚にも興味を示していく。彼女達は日米の国境を超えた空間で、アメリカ人として、宝塚の特性に新たな観点を加える一方で、元来宝塚が持つ、国境を問わないファンダムシステムをも、進んで享受しているのである。

最後に彼女達に宝塚がもたらした日常の変化、そして何故宝塚が好きなのかと言う質問をぶつけてみた。

宝塚のお陰で日本語を勉強せざるを得なくなった。だって日本語分らないと雑誌も読めないし、作品も観に行けない。あとは、家族みたいなファン仲間が出来たことかな。宝塚のファンって他のファンダムを通じて知り合った子達と違って、ずっと連絡を取り合っている。だって経験を積んだファンに聞きたいことが沢山あるもの。宝塚ってまずファンダム自体が本当に変わっているし、皆スターさんが来ても静かだし、拍手も短いし、声も出しちゃいけないし、本当にわからない。だから、常に助けが必要。ていうか、日本人のファンってなんであんなに静かなの？わからない。でも、宝塚が好きだから、変だって思っけていても、それを知ろうとする努力をやめることは無いかな。(A)

ここでも先に述べたように、A は日米の国境を明らかにした上で、自身をアメリカ人として捉えており、日本人のファンとの差別化を図っている。しかしながら同時に、宝塚を理解するべく、日本の宝塚ファンダムを受け入れる努力をしているのである。

色んなことに関して影響を受けていると思う。まずはやっぱり友達。昔から仲の良い友達は沢山いたけれども、今定期的に話す友達は皆宝塚のファン仲間。あとは、宝塚を観たい気持ちが強すぎて、飛行機に乗れるようになったこと。今までは飛行機が怖すぎて、28年間一度も乗ったことが無かった。だけど、宝塚のおかげで飛行機に乗れるようになって、世界が変わったと思う。あとは、日本語。日本語勉強しないと絶対に宝塚理解できないから。でもそのお陰で日本でも仕事がある。(C)

宝塚の文化って本当に面白くて。好きなスターがいて、手紙も書けるし、劇場の外で入出待ちも自由に出来て、ラッキーだったら名前も覚えてもらえる。いつも私をインスパイヤーしてくれて、毎日がより幸せに思えて、常にベストを出すことを後押ししてくれる様なスターさんの存在があって、彼女達にたまに会えるって本当にステキなことだと思う。だから私は宝塚が本当に好き。(H)

一番は友達。同じ興味を持っているというだけで、こんなにも親しくなれる。あとは、あんなにもパーフェクトに見えるジェンヌさんでもたまにストラグルしているのがすごくわかることかな。でも彼女達はなんとかしよう和努力している。自分が失敗をしたり、悩んだときにジェンヌさんのことを思い出して、私も頑張らなきゃと思う。(I)

タカラジェンヌさんは私のビタミン剤。いつも奇麗で礼儀正しいし、だけどすごくコンペティティブな世界で戦っていて、努力しないと絶対にトップになてられない。仕事で嫌なことがあっても、自分の最良が頑張っているって思えるだけで、私も頑張れる。(日本人 Y)

ここに全てのインタビューを載せることは出来ないが、彼女達が日常生活においても、宝塚の、そしてタカラジェンヌの影響を受けていることが分かる。Cは「宝塚が観たい気持ちが強すぎて」飛行機に乗る恐怖を克服し、その後、彼女の生活や仕事の場を日本にまで広げた。Hは、お気に入りのタカラジェンヌが自らの生活をより良くしてくれる存在だと言っている。IやYも同様、タカラジェンヌの葛藤や努力が、自身を奮い立たせる大事な役目を果たしていると言う。今回は彼女達の日々の生活に深く踏み込んだ分析ができなかったのと、彼女達全員が答えた、他のファンとの繋がり的重要性についてもあまり触れることが出来なかった。将来的に、ファン個人の私生活に目を向けた考察、更にファン同士の繋がりや、コミュニティの分析を行っていきたい。しかしながら、少なからず彼女達は日常生活レベルでも宝塚に大きな影響を受けており、彼女達にとって宝塚は、優れたアメリカ、劣った日本、という定義ではもはや表すことが出来ない、特別な存在なのだ。また、彼女達は単にホモセクシュアル、あるいは、ホモソーシャルな劇団として宝塚に魅力を感じているわけでもない。トランスナショナルな視点から彼女達ファンを追跡することで、彼女達が文化国境を、時には明確に、そして曖昧にしながらも、自らの目的にあわせる為に、宝塚を新たなファンダムへと日々作り替えられていることが分かる。

V. 終わりに

本稿では、トランスナショナリズムを軸に沿え、宝塚の西洋化と、宝塚の舞台上で描かれる女性同士の関係性について、アメリカ人女性ファンの考察を行った。彼女達は西洋化した宝塚を、アメリカメディア、渡辺、レチンスカのいう、日米間に存在する政治的・経済的な権力構造の基に成り立つ、文化間の優劣、を見ているのではない。むしろ彼女達は、宝塚の西洋化を、宝塚を理解する為に有用であるとしている。というのは、彼女達が宝塚に望む要素の一つは、日本らしい宝塚ではなく、言語バリアを超える為の手段としての、西洋化した宝塚なのである。また、彼女達は、時に度が過ぎた宝塚の西洋化にも言及しており、日米の国境を明確にした、アメリカ人としての立場でも宝塚の西洋化を理解している。こういった点で、彼女達は日米の文化国境を明らかにすることも、不透明にもすることも出来る存在であるのだ。

女性だけで演じる、という宝塚の特徴において、アメリカメディア、ロバートソン、東は、国家内に枠組みを置き、宝塚は女性同士のホモセクシュアル、あるいはホモソーシャルな関係性を日本人ファンに提供すると議論していた。しかしながら、アメリカ人の女性ファンインタビューから、彼女達の視点は多様であり、アメリカでの社会的立場や自己アイデンティティに応じて、彼女達が、宝塚で描かれる女性同士の関係性を捉え直し、再構築していることがわかった。例えば、LGBTQのアメリカ人女性ファンは、宝塚が本来意図しない、ホモセクシュアルなタカラジェンヌの関係をアメリカ人として見いだすと同時に、明確な国境を介さない、宝塚のファンダムを受け入れていた。

トランスナショナルな視点でアメリカ人女性の宝塚ファンを見た時、彼女達は国境を越え、文化間の優劣を超えた関係性を提示する存在である。しかし同時に、彼女達はアメリカ人として宝塚を見ることも止めず、アメリカに置かれた自らの立場や状況に応じて、宝塚に新たな意義や意味を付け加えて続けているのである。そして彼女達は、自分に見合った多種多様な視点から宝塚を理解し、社会文化的価値や自身のアイデンティティを、宝塚を通して構築し続けている。これらの視点は、宝塚という舞台芸術を国家的な枠組みで捉え、日本国内のファンのみ焦点をあてた先行研究では語られていない。故に、トランスナショナルにアメリカ人女性ファンを考察した本稿は、既存の宝塚研究およびファン研究に新たな視点をもたらすであろう。

注

- i The New York Times, the guardian の他、NorthJersey.com 2016, Vulture 2016, Zealnyc 2016、などでも宝塚版「シカゴ」を「けばけばしい」、「同性愛を表象しているような舞台」、「理解しがたい大きな羽や舞台演出」、などと批判している。
- ii 筆者の友人であるアメリカ人女性ファン R は、2016 年 8 月に日本であった際に、『シカゴ』を観た時、アメリカで宝塚を観られることに感動して泣いてしまった」と言っていた。
- iii ティレルの他、ハントも「社会や人々個人」に焦点をあてたアメリカ史の重要性を説いている(Hunt 2014:11)。またホスキンス、グエンも「トランスパシフィック」をフレームワークに、「人々、文化、資本、考え」がどのようにアメリカ、アジアで相互に影響を与えたのか、を記している(Hoskins and Nguyen 2014:2)。
- iv タカラジェンヌとは宝塚歌劇団に属する役者団員のことである。宝塚歌劇団では彼女らを「生徒」、または「タカラジェンヌ」と呼んでいる。
- v 例えば、2016 年宝塚大劇場、東京宝塚劇場、またその他の劇場を含めて上演された、計 29 の公演のうち、日本ものが上演されたのは、3 公演だけであった。
- vi 2016 年のレビュー作品を見ていくと、宝塚大劇場、東京宝塚劇場、またその他の劇場を含めて上演された、計 14 の公演のうち 13 公演が洋もののレビューであった。
- vii レチンスカは宝塚を「キッチュ」とする海外での言説を、「取り柄のない、芸術的な価値のない作品をさす、軽蔑的な意味」と表している(レチンスカ 2013:96)。
- viii 宝塚歌劇団では、男役と娘役、つまり、女役を生徒それぞれに割り振り、基本的に退団するまで、割り振られた「性」を演じ続ける。本稿では女性を演じる出演者には全て「娘役」を用いる。
- ix すみれコードとは団員のプライベート等を公にしないための歌劇団独自のルールであり、「秘密にするのではなく、話題にしないという意味で」を含んだ、「舞台や取材での最低限のルール」である(日向 2007:53)。
- x 東の言う「タカラジェンヌの四層構造」とは、舞台上の作品内で存在する「役名の存在」、舞台上で作品外に存在する「芸名の存在」、舞台裏で「すみれコード」によって制限がありながら一般に公開される「愛称の存在」、そしてプライベートとして一切公開されることの無い「本名の存在」のを示したものである(東 2015:96)。本稿では「愛称の存在」であるオフステージに着目をするが、タカラジェンヌの「愛称」について深く触れないため、「オフステージ」と呼称する。
- xi このオフステージの様子は、宝塚歌劇団が公式に放映している、有料テレビ番組「タカラヅカ・スカイ・ステージ」や毎月刊行される『宝塚 GRAPH』、『歌劇』などでファンは定期的に見ることが出来る。「タカラヅカ・スカイ・ステージ」は 2002 年に設立された、宝塚歌劇の専門テレビチャンネルであり、過去の舞台や最近の舞台、タカラジェンヌのオフステージを紹介するトーク番組、最新情報等を毎日、朝から晩まで放送している。『宝塚 GRAPH』、『歌劇』は月に一度阪急電鉄株式会社コミュニケーション事業部によって刊行されており、必ずタカラジェンヌのオフステージの様子が取り上げられている。
- xii 7 人のインタビュイーである女性宝塚ファンには、本稿で彼女達のインタビューを載せることに許可をもらっている。
- xiii Takarazuka Revue Fans in NYC (ニューヨーク宝塚歌劇団ファンの集い) はフェイスブックの非公式サイトであり、ニューヨークを中心としたメンバーがほぼ毎日のように宝塚に関する投稿をしている。ちなみにメンバーは必ずしもニューヨーク在住ではなく、アメリカに限らず、世界各国にメンバーがおり、基本的に全て英語で投稿がされている。2017 年 9 月 6 日の時点でメンバー数は 205 人である。

xiv 雪組は宝塚の中で唯一、日本ものを上演することが多い組であると言われる。

xv 「ちぎみゆ」とは、2015年から2017年の間、雪組でトップコンビを組んでいた、男役、早霧せいな（愛称：ちぎ）と娘役、咲妃みゆ（愛称：ゆうみ）のコンビとしての呼称である。宝塚では、トップコンビや相性のいいコンビ（特に男役コンビ）の間で、このような呼称がファンの間で用いられる。

xvi 龍真咲は2012年から2016年まで月組で男役トップスターをしていた。龍と同時にトップ娘役に就任したのは愛希れいかである。また、龍が退団した後、珠城りょうが新たに男役トップスターとして主任した。Uは龍と愛希の関係性と珠城と愛希の関係性をここで見比べている。

<参考文献>

日本語文献

東園子『宝塚・やおい、愛の読み替え-女性とポピュラーカルチャーの社会学』、新曜社、2015。

東園子「話題提供 男役/娘役らしさを装う-タカラジェンヌの私服の演出」、『生活學論叢/日本生活学会 Vol.17』（日本生活学会第37回研究発表大会公開シンポジウム「異装の考現学」報告）、2010、73-75。

井伊春樹「小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか」、ミネルヴァ書房、2017。

イヴ・コゾフスキー・セジウィック『男同士の絆-イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（1985）。上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版界 2001。

井口裕紀子「研究ノート:自分らしさを求めて-ミュージカル『ウィキッド』とファン・カルチャーを生み出すファンたち-」同志社グローバル・スタディーズ第6号 2016年3月発行、145-160。

河津孝宏『彼女達の「Sex And The City」海外ドラマ視聴のエスノグラフィ』、せりか書房、2009。

中野榮太郎「男装の麗人と西條エリ子」、『婦人公論』、1935、161-67。

橋本雅夫『夢を描いて華やかに 宝塚歌劇 80年史』、宝塚歌劇団、1994。

日向薫「宝塚歌劇団の「生活と仕事」」江藤茂博編『宝塚歌劇団スタディーズ-舞台を100倍楽しむ知的な15講座』戎光祥出版、2007、37-55。

松井みどり「幻想装置としての『少女』-『未成年』の誘惑」『文藝別冊 [特集] タカラヅカ』河出書房新社、1998、194-200。

モニカ・チェチリヤ・レチンスカ=ルフニェヴィチ「西洋における宝塚歌劇需要の諸問題」『演劇学論叢』、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室第13号、2013、93-108。

吉田弥生編著『歌舞伎と宝塚歌劇：相反する、密なる百年』、開成出版、2014。

渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』、新書館、1999。

「宝塚歌劇 103 年 小川理事長、観客動員数の増加に手応え」産経ニュース, 2017 年 2 月 5 日 <http://www.sankei.com/entertainments/news/170205/ent1702050008-n2.html> (2017 年 9 月 10 日アクセス)。

英語文献

Adrienne, Rich. "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence."

Journal of Women in Culture and Society, vol.5, no.4. Chicago: The University of Chicago.1980.

Hills, Matt. *Fan Cultures*. London and New York: Routledge. 2002.

Hunt, Lynn. *Writing History in the Global Era*. New York: W.W. Norton & Company. 2014.

Janet, Hoskins and Viet Thanh Nguyen. *Trans pacific Studies -Framing an Emerging Field*. Honolulu: University of Hawaii Press. 2014.

Jeffreys, Shelia. "Women's Friendships and Lesbianism." *Feminism and Sexuality: A Feminist Reader*. Ed. Stevi Jackson. New York: Columbia University Press. 1996, 46- 56.

Jenkins, Henry. *Textual Poachers: Television Fans and Participatory Culture*. New York: Routledge.2013. (First Edition published by Routledge, Chapman&Hall 1992).

Kano, Ayako. *Acting Like a Woman in Modern Japan- Theatre, Gender, and Nationalism-*. Beigingstoke: palgrave, 2001.

Robertson, Jennifer.*Takarazuka:Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan*. California: University of California Press. 1998.

Thelen, David. "Transnational Perspectives on United Staates History." *The Journal of American History*, Vol.86, No3. Oxford University Press. 1999, 965-75.

Tyrrell, Ian. "Reflections on the transnational turn in United States history: theory and practice." *Journal of Global History* Vol.4, No3. Cambridge University Press. 2009, 453-474.

Tyrrell, Ian. *Transnational Nation – United States History in Global Perspective since 1789-*. Basingstoke: Palgrave macmillan. 2007.

Wolf, Stacy. *Changed for Good: A Feminist History of the Broadway Musical*. New York: Oxford University Press. 2011.

Yano, Christine. *Pink Globalization- Hello Kitty's Trek Across the Pacific*. Durham :Duke University. 2013.

Brockers, Emma. "Takarazuka Chicago review-all female Japanese cast revitalize tired classic." *the guardian*. July 21th, 2016.

<https://www.theguardian.com/stage/2016/jul/21/takarazuka-chicago-review-all-female-japanese-cast-new-york> (accessed September 2, 2016).

Feldberg, Robert. "Theater Review: 'Takarazuka's Chicago'." *NorthJersey.com*.July 23th, 2016.

<http://www.northjersey.com/story/entertainment/theater/2016/07/23/theater-review-takarazuka-s-chicago/94952072/> (accessed September 2, 2016).

Green, Jesse. "Theater Review: An All-Female, All-Japanese *Chicago*." *Vulture*. July 21th, 2016. <http://www.vulture.com/2016/07/theater-review-all-female-all-japanese-chicago.html> (accessed September 2, 2016).

Isherwood, Charles. "Review: In Takarazuka's 'Chicago,' the Midwest Looks a Lot like Japan," *The New York Times*. July 21th, 2016. <http://nyti.ms/2aci4mE> (accessed September 2, 2016).

Rosenblum, Joshua. "Review: Takarazuka Invades the Lincoln Center Festival with an all-female production of *Chicago*," *Zealnyc*. July 22th, 2016. http://www.huffingtonpost.com/zealnyc/takarazuka-invades-the-li_b_11145136.html (accessed September 2, 2016).

TonyAwards.com- The American Theatre Wing's Tony Awards- Official Website by IBM <https://www.tonyawards.com/index.html> (accessed November, 2).